

和木小学校コミュニティ・スクールだより

緑の風



令和7年・10月号

ホーム <http://www.sky.icn-tv.ne.jp/~wakisho/> E-mail wakisyo@sky.icn-tv.ne.jp

「みんなちがって、みんないい。」の先にあるもの

校長 福江大幸

毎年この時季になると咲くヒガンバナ。アスパラガスのような茎だけがぐんぐん伸び、突然のように花が咲いたように見えるので、いつも驚かされます。そして、花が終わった後に葉が出てくるため、花と葉を一緒にイメージできない不思議な植物です。植物は様々な色や形の花をつけて人々を楽しませてくれますが、その種類は約30万種あると言われています。まさに多様性の世界です。人間も、約6000種あるほ乳類の一種であり、その我々も一人ひとりみんな違います。多様性の時代と言われるように、現代社会は一人ひとりの違いを大切にし、生かしていくことをめざしています。



この点について、学校は反省しなければなりません。明治の初期にその原型がつけられた学校制度は、みんなで同じように同じことをするという画一的な教育に向かっていました。知識・技能の伝達にはその方法が効率的であると考えられたことによります。さらに、学校だけでなく社会にも同調圧力の空気が流れています。みんなと同じでなければならない、周りに合わさなければならないという、目に見えない圧力に生きづらさを感じる人たちがいます。

そこで、学校教育の指針となる学習指導要領には、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越えていく力の育成をめざしています。授業では、子どもたちが様々な意見や考えを出し合い、話し合うことを通して、唯一の正解ではなく、その時点での最適解や納得解を求めていきます。自分にはない考えに触れることで、「〇〇さんの意見を聞いて、そんな考え方もあるんだなと思った」のように、考えが広がっていきます。さらに、「自分は気づかなかったけど、〇〇さんってすごいなと思った」のように、仲間へのリスペクトによって仲間意識も深まっていきます。多様性の理解とは、自分と異なる考えの人がいることに気づくこと、さらに自分も多様性の一部であると受け止めることです。さらに、その先にあるのは、一緒に取り組むこと、協働することで生まれる学びへの貢献意識です。

性別や国籍、言語や習慣といった分かりやすい多様性だけでなく、人は一人ひとりみんないろいろな考えをもっているという内面的な多様性を学ぶことこそ、仲間と共に学ぶ意味です。そして、多様性の中にも誰もが大切にされるべき存在であるという共通性も伝えていきたいと思います。

和木小コミスクひろば



9月13日(土)、人権教育参観日において、「教育講演会」を実施しました。講師の竹内昌彦さんのお話は、参加者の心を大きく揺さぶるものでした。会の最後、高学年児童が数名、講演の感想を述べる姿には、感動しました。まさに人権教育だと思いました。

保護者、地域住民の参加者が少ないことが残念でした。今後の課題にします。

